
そんな気持ちだったなんて知らなかった

新田ひより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな気持ちだったなんて知らなかった

【Nコード】

N6536I

【作者名】

新田ひより

【あらすじ】

まさに捨てようとしていたそれに、僕は捨てないでと頼まれた。どうして私を捨てるのかと問い詰められた僕は・・・

私を捨てるんですか？

いやいやゴミじゃありませんよ。

ちゃんとしたこの子の仲間です。

そんな嫌な顔しないでくださいってば。

私たち生まれた時から一緒だったんで

もう家族同然で・・・って

聞いてますか？

いい加減怒りますよ。

私だってこんなこと言いたくありませんけど

これは差別です。

じゃあ理由を教えてくださいよ。

どうして私だけ捨てられるんですか？

外側のやつはともかく私は内側です。

もしかして白色がお嫌いなんですか？

私の肌が色白なのがお気に召さないのね。

だってこの子の肌はきれいなオレンジ色なんですもの。

仕方ないわ、諦めます。

どうぞ私を捨ててください。

さあ早く。

僕は唸った。

そんなことを言われた後で捨てろと言われても
いまいち決心がつかなかったのだ。

色白の子の視線を痛いくらいに感じながら

僕の手足や顔、背中までもが冷や汗でびっしょりだった。

「起きなさい朝よ。」

遠くのほうでお母さんの声が聞こえる。

「起きなさいってば！」

今度はもっとちかくで。

僕は目を開けた。

「もー。遅刻するわよ」

怒って部屋を出ていくお母さんを横目で見送った後、

僕は昨日捨てるのを忘れていたミカンの皮を見つめた。

皮の上にはきれいにとったミカンの節の部分がのっている。

僕は黙ってそれを口に含んで時間をかけて味わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6536i/>

そんな気持ちだったなんて知らなかった

2010年12月12日14時50分発行